

● 研究所プロジェクト活動・最近の研究活動紹介

Project 1 社会的公正に基づく共生の研究

国際共生研究所 Project 1 シンポジウム

「若者が語る多文化共生」

外国にルーツをもつ子どもの権利を考える」

2010年11月27日 於 本学

報告者 ^{もと}元 百合子

本研究所は2010年11月27日(土)、(財)アジア・太平洋人権情報センター(ヒューライツ大阪)との共催という形で、標記のシンポジウムを本学で開催した。真の共生とは何を意味するのか、日本に共生社会を構築するには何が必要かを様々な角度から考えることを目的とする企画である。日本社会は80年代以降、急速に民族的・文化的に多様化してきたが、国籍や民族的出身による差別は蔓延し、外国籍や外国にルーツを持つ市民・住民の人権状況は、決して良くない上、社会的関心を引くことも少ない。他方、「多文化共生」がともすれば表面的に語られ、一過性のイベントといった形で実践されがちな現状がある。

(財)とよなか国際交流協会の協力の下にパネリストとして招いた4人の若者たち(大学生・大学院生)が、シンポの趣旨を理解して、個人的な経験や家族とともに遭遇した苦難、思い、問題意識や主張を率直に語ってくれた。ベトナム難民二世のグエンティ・ホンハウさん、中国出身の焦春柳(ジャオ・ツウンリョウ)さん、日本とフィリピンのダブルである三木幸美(みきゆきみ)さん、在日コリアン三世の呉賢志(オ・ヒョンジ)さんである。そこで語られた様々な経験や思いをここで要約することは不可能かつ不適切であるが、血統主義の国籍法や出入国管理・難民認定法などの法制度自体の持つ問題点や、その運用における人権侵害、たとえば全件収容主義の非人道性や、家族の一部の退去強制による家族統合の権利の侵害などの実態が浮き彫りになった。グエンティさんは無国籍者として生きることを余儀なくされ、焦さんは両親が退去強制された後、子どもながらに入国管理局で毎月長い「説教」を聞かされるという辛い経験もしてきた。また4人とも、日本社会の排外性、自民族優越主義ともいえる偏見や差別を学校や社会で様々な形で経験しながら、民族的出身を含めた自己のアイデンティティを肯定し、誇りを持つようになり、同様な苦しみに直面する子どもたちを支援したいと考えて活動している。

対等、平等、人権をキーワードに日本社会を共生社会に作りかえる責任は、差別されマイノリティ化された人々

や子どもたちではなく、いわゆるマジョリティ、つまり不均衡な力関係の中で優越的な地位にある者の側にあることを改めて教えられ、考えさせられる有益な機会であった。

平和・人権研究会

第14回 2010年10月15日 報告者 黒澤 満 教授

「2010年核不拡散条約(NPT)再検討会議と核軍縮」

第15回 2010年11月12日 報告者 前田 美子准教授

「学校教育における不正行為：カンボジアを事例として」

第16回 2011年2月7日 報告者 香川 孝三 教授

「労働分野における日本のアジアへの国際協力」

Project 2 高等教育における英語教育の方法研究

Integrated Studies:

A new concept for instruction at OJC

報告者 Deryn P. Verity, Ph.D.

As of April, 2011, the first-year English curriculum at OJC's Tandai will feature a series of new English classes. Instead of studying reading, writing, and discussion in separate modules, first-year students will practice listening, speaking, reading and writing together in one class. This program, called Integrated Studies, meets for a total of 8 hours per week for the entire year, with each student studying English under 4 different teachers over two semesters.

Each class is organized around a conceptual theme. Both commercial textbooks and original, innovative collections of readings, compiled by OJC faculty members, are used. The themes are broad, and open to generous interpretation as the program is piloted for its first year.

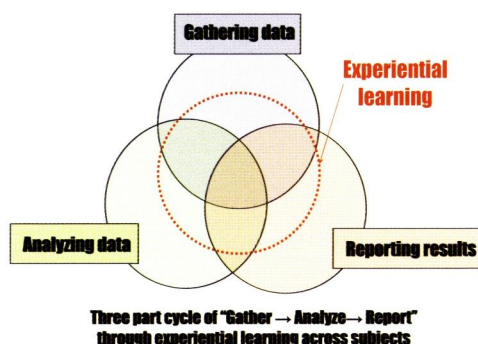
During Spring semester, in Integrated Studies 1: Identity (IS1—taught by native speakers of English), students will read, speak, and write about topics such as life goals, past and future achievements, personal and cultural traits, and career aspirations. Integrated Studies 2: Discovery (IS2—taught by native speakers of Japanese) will address a variety of cultural topics, such as language and culture, cultural values, non-verbal communication, health care, safety, and social interaction. In the Fall, both IS classes (IS3: Community and IS4: Equality) will focus on global issues such as social justice, human rights, food and water supply issues, poverty, war and peace, and environmental pollution.

Central to the design of this program is the PROJECT and the PORTFOLIO. Projects are integrated language practice activities, done in collaboration with one or more partners, comprising a 3-part cycle of gathering information, working with the information (analyzing, organizing, interpreting,

questioning), and, finally, presenting it in some form. Projects may result in oral reports, poster presentations, PowerPoint talks, dramatized dialogues, podcasts or short films, the publication of brochures, compilations of writings, or essays, or even a class book or multi-media production. At the end of each semester, students will compile their best work into a Final Portfolio, write a reflective comment on the work, and submit it for consideration.

Rhetorical patterns will be interwoven into the language practice at all levels: in IS1, for example, the focus is on Illustration. Students will learn to gather specific details and examples to support and illustrate main ideas. In IS2, the rhetorical focus is Comparison/ Contrast. Using rhetorical organization in speaking and listening practice as well as in more traditional reading and writing activities, the IS program aims to give students more complete mastery of the four rhetorical patterns that are common to all OJC academic classes: Illustration, Compare and Contrast, Cause and Effect, and Persuasion.

Interest and anticipation are high for the new program as the new academic year approaches.



Project 3 外国人児童生徒のための言語教育モデルの研究

報告者 加藤 映子

本プロジェクトは、秋学期に学習会を2回実施しました。いずれも本学に在籍しているバイリンガルの言語環境で育った3年生の学生4名に協力してもらいました。

第一回目の学習会では、朝鮮学校でコリアンを学習言語として教育を受けた 배정엽 裴丁葉 (ペ・チョンヨブ) さん、허영리 許英里 (ホ・ヨンリ) さん、김금향 金琴香 (キム・クンヒャン) さんにそれぞれの言語環境と言語教育について語っていただきました。この3人に共通している言語環境は、家庭では日本語でコリアンの単語が使われることが多いということです。「オモニあるいはオンマ (いずれも母を意味する)」を使っているのかと質問すると、「我が家では『パパ、ママ』です。」という返答には笑いが起こりました。幼稚園から朝鮮学校に通っていたという裴丁葉さんは、小学1年生から入学した許英里さんのコリアンの習得について次のように語っ

てくれました。「幼稚園から通っている私の方が、知っている単語や話せる事柄もたくさんありました。しかし、2、3年すると、だんだんと差がなくなり勉強がよくできるヨンリとなっていました。」この見解はバイリンガル教育の中でもよく指摘される事例です。後からスタートした学習者の言語能力が、2、3年で追いついてくるということです。また、今回話を聞いた朝鮮学校出身の学生の事例から明らかになったことは、ウリマル (私たちのことば) に対する民族のパワーです。高校から朝鮮学校に入学をした金琴香さんは、「入学をしてからハングルを学び、皆に助けてもらった。校長先生が個別指導をしてくれた」と話していました。ペ・チョンヨブさんも、「高校から入ってきたクンヒャンを助けよう」という気持ちで皆が応援していました」と語っていました。

第2回目の学習会に協力してくれたのは、母語の中国語を維持した上で日本語を習得した大野緑さんです。5歳の時に中国から帰国した大野さんは、家庭では中国語、学校では日本語を話す言語環境で育ちました。5歳で入園した保育園では全く日本語が理解できなかったのですが、半年ほどすると「私、日本語がわかる」となっていました。この事例もバイリンガル教育で指摘される事例です。幼少期の言語自体が遊びを中心したことばであり、話される内容がそれ程複雑ではないことが言語の理解を容易にするからです。加えて、この保育園でずっと付き添ってくれた先生の温かさを大野さんは今でも覚えており、その先生のおかげで日本の生活に慣れていくことができたと言っています。小学校では日本語での授業に問題はなかったが、中国語を母語とする子ども達の支援教室に参加していた。その支援教室で中国からの留学生の大学院生にピンイン (中国語のふりがな) を学び、中国語も読めるようになったということです。第2言語を学び始める時期、受け入れる側の環境や姿勢が、学習者に大きな影響を与えることを大野さんの事例は示しています。ちなみに、大野さんと話をしていると日本語が第2言語であることは全くわかりません。また、大野さんは自分の出身の小学校で自分の経験を話すボランティアもしています。

今回家庭での言語環境や受けた教育について、私たちにシェアしてくれた上記の学生の皆さんに感謝いたします。ありがとうございました。

国際共生研究所シンポジウム予告

公平で平和な世界へ ー国際共生の意義と役割ー

2011年10月

公平で平和な世界を構築するために、「国際共生」はどのような意義をもち得るのか、またどのような役割を果たし得るのかを、みんなで議論し、国際共生研究所の今後の進むべき方向を考えるシンポジウムの開催を予定しています。

国際共生研究所 HP にて、詳細をお知らせします。

<http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/RIICC>